

# 移動に住まう人びとは どこに埋葬されるのか

東アフリカ・ナイロート系アルル人の  
ティボ、ジョク、アビラをめぐる

Where do People Bury Their Beloved Ones? :  
Some Aspects of *Tipo*, *Jok* and *Abila* among the Alur People in East Africa

田原範子

TAHARA Noriko

はじめに

- ① 東アフリカにおける埋葬地をめぐる議論
- ② ナイロート系民族の祖霊観念をめぐる議論
- ③ 出稼ぎ地ルンガにおける死
- ④ 埋葬地の選択
- ⑤ ティボと暮らすこと
- ⑥ 生成される「ホーム」

## 【論文要旨】

本稿では、死という現象を起点としてアルル人の生活世界の記述を試みた。アルバート湖岸のアルル人たちは、生涯もしくは数世代に渡る移動のなかで、複数の生活拠点をもちつつ生きている。死に際して可能であれば、遺体は故郷の家（ホーム）まで搬送され、埋葬される。遺体の搬送が不可能な場合、死者の遺品をホームに埋葬する。埋葬地をめぐる決断の背景には、以下のような祖霊観がある。

身体（*dano*）が没した後、ティボ（*tipo*）は身体を離れて新しい世界へ移動する。ティボは、人間界とティボの世界を往来しつつ、時には嫉妬などの感情を抱き、現実に生きている人びとの生活を脅かす。病気や生活の困難はティボからのメッセージである。そのような場合、ティボは空腹で黒い山羊を欲している。その求めに速やかに応じるために、埋葬地は祖先たちの住む場所つまりホームが望ましい。

アルル人のホームランドでは、ティボはアビラ（*abila*）とジョク（*s.jok*, *pl.jogi*）とともに祀られている。ティボは現世の人間に危害を及ぼすだけの存在ではない。ティボの住まうアビラやジョクに対して、人びとは、語りかけ、家を立て、食物を用意し、山羊を供養する。父や祖父のティボを通して、祖先の死者たちは生者と交流する。その交流は、生者に幸運や未来の予言をもたらすこともある。

死者と生者が共にある空間で、死者のティボは安住することができる。移動に住まう人びともまた、死者をホームに搬送すること、死者の代わりに死者の遺品を埋葬することを通して、ティボの世界と交流している。

【キーワード】 ウガンダ共和国、アルル人、移動、生活世界、ティボ、アビラ、ジョク